
一つの異世界

南津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの異世界

【Nコード】

N0626Z

【作者名】

南津

【あらすじ】

四季一しきいちは大学に通う21歳の青年。中性的な整った顔立ちで、日本人らしい黒髪黒目。両親を幼い頃に亡くし祖父の家で暮らしていたが3年前にその祖父も亡くなった。両親と祖父の残してくれた遺産で大学近くの賃貸マンションを借り、階下にある洋服店でアルバイトをしながら一人暮らし。海外への短期留学の際に事件に巻き込まれて死亡、異世界に。膨大な魔力と特異な能力をもち、一人で異世界に放りだされたハジメの物語。

第0話<プロローグ>（前書き）

初めて書く物語ですので、文章が拙いものになっていたり。主人公最強物になりますが、戦闘が多いわけではない、と思います。バツサバツサ敵を斬ったり殲滅したりにはならないはず。ゆっくりとした更新になると思いますが出来るだけ長く連載をしていきたいと思っています。

第0話<プロローグ>

「……」

僕の人生が終わった。

21年。今日までの人生を振り返って長いのか短いのか。

天寿を全うする者からすると短いだろう。母親から生まれて学校に通い、就職して退職。子供を育て両親を看取る。残りの人生をゆつくりと過ごすのが人生の目標だと言う人もいるだろう。

80年。だいたいその80年の間に人は様々な事を経験する。

僕の21年はどうだっただろう。

幼い頃に両親を亡くし、祖父に引き取られて中学・高校に進学。祖父を亡くして大学に進学。借りているマンションの一階にある被服店でアルバイトをしながら生活費を稼ぎ、親の残してくれた遺産で大学に通う。

在学中に海外へ短期留学し、その海外でテロに巻き込まれて死亡。

そう、銃撃を受けて死んだはず。

「……ということはどうゆうこと？」

目の前に広がっている風景はテロ巻き込まれた場所じゃないことは確か。

人が溢れていた街中の景色はなく木漏れ日が溢れる森があった。辺りには木や草のほかは何も無い。銃で撃たれたはずの胸や腹部には風穴があいて……いない。

「撃たれてない？ いや、確かに撃たれた……はず」

マシンガンみたいなので撃たれて死んだ……いや、死んでないけど。とにかく此処が何処だか分からないからな。とりあえず森から出るべきなのかな？

「まあいいか」

とりあえず森から出て人を探すことにしよう。此処が何処だか分からないんじゃない？日本に帰れないし。

今日は留学先から日本に帰る日だった。チケットも買ったし……

「……って、あれ！？ カバンがない！？」

今気づいたが持ち物が何も無い。チケットも財布も他の物もカバンに入れていた。大体のものは自宅に送ったが……

「はあ、パスポートもない……」

ポケットを探ったが中には何も無いみたいだ。

「どうやって家に帰れというのだ」

お金もないし、こういうときは何処に行けばいいんだ？ 空港？
大使館に行けばいいんだっけ？

「とりあえず森を出ようか」

どちらに行けばいいのか分からないので少しでも明るい方に行くか。

「……」

しばらく歩いて行くと何やら物音が聞こえてきた。人かな？
森といたら熊とかだけでもそうそうエンカウトするようなもので
もないだろう。……海外なら狼とかいるのか。

「怖っ」

少々寒気がしたが大丈夫……だろう。

……念のため石と木の棒を拾っておこう。

人じゃなかったら怖いから……慎重に近づくとしよう。

物音のするほうに気配を消して近づく……祖父に習って剣道を少し
やっていただけ気配消す練習なんてしていない。
気分の問題だ。

近づいてみて驚愕した。

「なん……だと……」

なんて言っただけを紛らわさないとやってられない。

熊みたいなのがそこにいた。体格的にみてそう判断したんだが……
これはヤバイ。

その熊を更に大きな何かが貪っている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

熊や狼ならともかくあんな物に襲われたらあの熊みたいになっ
てしまふ。

可及的速やかに此処を離れなくては。足音と息を殺して慎重に離れ

ないと。

此処でお約束の枝なんか踏んで物音を立てるようなドジな真似なんかしない。

慎重に……

ガサッ！

「っ！！」

……決して僕じゃないですよ。ホントに。

物音がした方を見ると何やら小さな動物がこちらを伺っていた。

「……」

振り返ってみると其処にいた何かは此方を見ていた。

いやいや……勘弁してくださいよ。

「っ……はっ、くう！」

引き離せない！ どころか少しずつ距離が縮まっている気がする！
とりあえず明るい方へ走っているが後ろのストーカーが諦めてくれない。

だんだん足音が近くなっている気がする。

僕は美味しくないよ！？

絶対さっきの熊みたいなやつの方が肉も多いに決まってるよ!!
何でこっちにくるんだ。

泣き言を口から洩らす余裕もない。息が上がる。足が上がらない。
足には自信があるが足場の安定しない森の中で必要以上に体力が奪
われる。恐怖で緊張し更に思うようにいかない……

「っ……!!」

瞬間、背筋に悪寒が走った。

咄嗟に横に跳ぶと今まで走っていた所を何か大きなものが過ぎった。
目の前に出たのは毛皮に覆われた何か。さっきから追いかけて来て
いたやつだ。よく見ると狼に似ているが正面から見ただけで自分の
身長を超えている。顔は真っ赤に染まっっていて先ほどの食事の
跡が窺える。

既に立ち上がる気力すらなく恐怖に震える。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

それは此方に向けて跳んできた。

恐怖が膨れ上がり体の奥から何かが急速に広がる感覚。

そこで僕は意識を失った。

第0話<プロローグ>（後書き）

おわり……え？

まだ主人公の名前も出てないので続きます。

第1話<四季一>

「……ん」

体が重い。なにがあつたんだ？

テロで殺されて、それで……

森の中で彷徨つて……

「美味しくないよ！？」

「……っ！？」

食べられる前に見た光景を思い出し、叫びながら勢いよく起き上がる。体は重い感じがするが特に痛みは無い。味見もされなかったのだろうか。あの状態で無事だったことが信じられない。あの巨大狼が目の前に迫る瞬間が鮮明に思い起こされる。

「夢か」

無事なところを見ると夢だったのだろう。妙にリアルな夢を見てしまったようだ。最早何処から何処までが夢だったのか分からない。テロに巻き込まれたのも夢だったのか？

「目が覚めました？」

「え？」

不意に声をかけられて其方を見ると、其処には見たことも無いような美少女がいた。年齢は自分と同じくらいか少し下の金髪の少女が椅子に座って此方を見ていた。艶やかなロングの髪は少女の整った

顔立ちによく映える。透き通る碧眼は此方の姿を捉えている。少女の姿に思考が停止した。

「……………」

「…………聞いてます?」

何か此方に話しかけていたらしい。

「あ、すみません。聞いてないです」

惚けていたことを恥ずかしく思いながら何とか返答する。あ、聞いてないですなんて失礼だよな……。まあ実際に聞いてなかったんだから仕方ない。

「…………。ディゴウの森で何があったのか教えてもらえます?」

聞いたこと無い単語だ。何語だろうか。

「ディゴウ?」

「あなたがいた森のことです。二日前あなたが倒れていた森です。覚えてないですか?」

「いや、森にはいたけど…………二日前、ですか?」

どうやら二日も眠っていたらしい。ということはもう九月になったのか。明後日からバイトが入っていたっけ。帰るのに時間がかかりそうだから後でバイト前に電話を入れておかないといけないな。留学で結構お金を使ってしまったから少しバイトを増やした方が良さだろうか。大学卒業してしばらく暮らすには問題ないが、親が残してくれたお金は出来るだけ残しておきたい。

「ええ、今日はテルトゥリアー巡月の七日です」

再び聞いたことの無い言葉が出てきた。

「……テルトゥリア？　つて、なんですか？」

とりあえず聞いてみる。言い回しから今日の日付を言っているのだから事は分かるのだが……

「……大地の神の名前です」

「大地の神？」

「ええ、風の神ヴァンテセラ、火の神フォティエナ、大地の神テルトゥリア、そして水の神オーズイオ。その名前は風の季節、火の季節、地の季節、水の季節のことも示しています。常識ですよ？　覚えてないんです？」

「いや、そもそもそんな神様なんて知らないですけど」

「……」

「……」

二人の間に重たい沈黙が流れた。そんな神様は聞いたことが無い。この際分らないことは置いておいて現状の把握に努めることにしよう。

「……えつと、ここは何処ですか？」

とりあえず当たり障りの無い内容から確認する。意識を失っていた人間の常套句だ。

「……ここは私の家です。貴方はディゴウの森で気を失っていて、色々と聞きたいことがあったので保護しました。森で何があったか

聞かせてもらってもいいですか？」

「それはいいですけど……それならあとで君に聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

此方も色々と確認しなければいけないことがあったため、後で聞いてみないといけない。

「……いいですよ。私はフランシエシカといいます」

君という呼び方をしたためか彼女は名前を覚えてくれた。そこで自分も自己紹介をしていなかった事に気付く。

「あ、すみません。僕ははじめ一といいます。四季しきはじめ一です」

「シキというと季節の四季ですか？」

「ええ、四季が苗字で一が名前ですね」

「みょうじ？」

苗字が分からないらしい。外国の人みたいだからかな？

「あ、えーとファミリーネーム？ 家名ですか？」

「ということはハジメ・シキですか」

「そうなりますかね……？ あれ、そういえば日本語が通じてるんですか？」

日本語で話しているつもりなのだが、此处は日本なのだろうか。

「ニホンゴ？ 話しているから言葉は通じてますよ。この世界で生まれたものには皆言葉の加護がありますからね。会話は誰とでもできますよ。文字はいくつか種類があるので……って常識です」

コトバノカゴ……？

「え。言葉の加護ってなんですか？」

「……」

「……」

どうやらこれも常識というものみたいだ。

「……とりあえず、森であったことを先に聞いていいですか？」

「……そうですか」

森での出来事をフランシエシカに説明すると、彼女は沈痛な面持ちで頷いた。

「ええ。あれはなんだったんですか？ 見たことのない動物だったんですけど」

「それはおそらくクルオルウルフだと思う。最近あの森で目撃されていた魔獣ね。私もあの魔獣を討伐しにディゴウの森に行ったんだけど、現場の様子と貴方の話を聞いたところもう死んでるようね」

「……？ 死んでるって……そのクルオルウルフ？ とか言う」

僕が死んでいないのだから何かあったのだろうが、死んでいるとはどういうことだろうか。話し方からすると死体の確認をしたわけではなさそうだけど。

「ええ。おそらく貴方の魔力の暴走で跡形もなくね。酷いもんだつたわよ。普通の人間の魔力が暴走したところであそこまで被害が出

ることなんてないのに。精確には分かんないけど見た限りじゃ貴方の魔力は私以上ね。いえ、たぶん貴方より魔力が高い人なんて居ないんじゃない？ 貴方本当に人間なの？」

魔力？ 暴走？

「人間ですけど……。それより魔力ってなんですか？ そんなもの無いと思いますけど」

魔力というとあれだよ、ファンタジーとかでよく聞く。物語の中では聞いたことがあるけど、実際にそんなものがあると聞いたことは無い。宗教の勧誘だろうか。

「……貴方それ本気で言ってるの？ さっきから常識も知らないし」「いや、常識と言われても。知らないものは知らないですし」「そう。……そっぴえば貴方何処から来たの？ 常識も知らないし何処かの山の中で暮らしていたのかしら？」

なんだか失礼なことを言われた気がする。……まあ良いけど。

「街に住んでましたけど……日本です」

「ニホン？ 聞いたこと無い国ね。えっとこの地図のどの辺りかしら」

部屋の棚から折りたたまれた少し茶色掛かった紙を引っ張り出してきた。地図らしい。それを広げて見せてくれる。

日本は太平洋の……太平洋……の……

「……えっとこの地図って何処の地図ですか？」

「……世界地図だけど」

見たこと無い地形の描かれた世界地図らしきものが。大陸のようなものは……三つか。どれも見たことが無い。地図に書き込まれている文字も見たことが無い……

「ははは、冗談きついですね。こんな世界地図見たことないですよ」

「……」

「はは……は……」

「……」

「異世界……ね。本当にそんな所があるのかしら」

フランシエシカに森に来る以前のことを説明した。今まで居た世界がどんな世界だったのか。そして、どのようにして死んだのか。

「いや、僕も分かりませんよ」

本当に分からない。でも、今が現実だというのならそうなのだろう。あの世界で銃で撃たれたことも、この世界で生きていることも。

あちらの世界での扱いはどうなっているのだろうか。日本のニュースなんかで「行方が分からなくなっているのは日本人留学生の四季一さん。現場に所持品が残されていたことより……」なんて報道されているのだろうか。

死体は残っているのだろうか。

「その話が本当なら、貴方はそちらの世界で死んでるんじゃない？」
「まあ、あの痛みは本物だったけど」

傷が残っていないということは別の肉体なのだろうか……治っただけなのか。

「そちらの世界で死んで、原因は分からないけど此方の世界にその姿で転生した。そう考えるべきでしょうね」

「あの傷で生きていられるとは思えないよね……もう戻れないかな」

身内も居ないし、あまり困ったことにはならないだろうけど、バイト先とか大学とかにはそれなりに迷惑が掛かるかもしれない。

「少なくとも異世界へ行ける、なんて話は聞いたことが無いわね」

やはり此方の世界でもそんな話は聞いたことが無いらしい。帰る方法を探しながら此方で暮らしていくしかないのだろうか。……向この世界にあまり未練も無いけど。

「そっか……これからどうしようかな」

「とりあえず、この世界のことを話すから。それから考えましょう？」

「そうですね」

とりあえず此方の世界のことを聞いてから考えるのもいいだろう。

魔力なんてものがあるくらいだから魔法なんかもあるだろう。

少しわくわくしてきたのはとりあえず内緒だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626z/>

一つの異世界

2011年12月3日14時52分発行